〝さかな〟の呼名

正田豊彦

私達誰でも、そのひとり〳〵に別々の名前がつけられているように、魚の各種にもそれ〴〵名前がつけてあります。然し決して私達の名前の様に細分されたものではなく、大きな区分けなのです。若し人間のように、一尾々々に名前がついていたとしたら、とんでもなく面倒なものになることでしよう。しかし一種類内の種族等を研究する場合には、或ひはとても便利かも知れませんね。

魚の名前といつても、人間に便利なように、凡て便宜上、各魚種に付けたものでありますから、魚にとつてはかえつて迷惑かも知れませんし、若し魚達に或言葉があつて、私達にも通じたとしたら、岐度文句を云うことでしようね。これから筆の動くまゝ魚種に付けられている名前について書いて見ましよう、一般に魚につけられているものを大きく三つ分ける事が出來ると思います。

先づ日本近海に産する〝さかな〟の数だけでも数千にのぼりますが、その中にはアユ、マスのように日本特産及び旧日本近海にのみ生棲するものもあり、多くの鮭類のように淡水で生れ、遠く寒い海へ大旅行するものやら、もつと遠く太平洋の向う側にまで泳ぐ、洋行するようなものもあります。此等を含め各魚種の凡てに万國共通な名前がつけられて居ります。これを学名（Scientific name）といつて、私達の姓名のように、名詞と形容詞を併列する二名法を用いるように決められて居ります。学名は今は殆んど世界で使はれないラテン語、古代ギリシヤ語のラテン化したもの或はラテン語尾変化した各國語から造られて居ります。学名の後にその命名した人の名を書く事になつています。私達の呼びなれている Oncorhyuchus Keta (Walbaum), Oncorhynchus masou (Brevoort), Oncorhynchus gorbuscha (Walbum), Oncorhynchus tschawytscha (Walbaum), Oncorhynchus nerka (Walbaum), Salno irideus Gibbons 等は凡て学名です、即ちOncorhynchus はギリシヤ語で鉤のように曲つた顎の意味であり、Ketaはカムチャッカ地方の土俗語なのです。世界中のさかなの專門家は、この学名を見たゞけで、この魚がどんなものか理解出來るようになつ

ています。

次にこれ等の学名を呼ぶのは難かしく、面倒なので各國によつてそれ〳〵呼びやすい名前が付けられているのが普通です。これは最も廣く用いられている名稱これを標準和名（海産魚は東京魚市、淡水魚は琵琶湖での呼名）として用いられており、Oncorhynchus Keta に鮭、Oncorhynchus masou に鱒、Oncorhynchus gorbuscha にからふと鱒、Oncorhynchus nerka に紅鱒、Oncorhynchus tschawytscha に鱒之助、Salmo irideus に虹鱒等がそれであります。一方アメリカ及びカナダでも、鮭を Chum salmon からふと鱒を humpback salmon, 紅鱒を Sokeye salmon, 鱒之助を King salmon, 虹鱒を Rainbow trout と呼び馴れているような有様です。

處が次にお話しするものは、各國は勿論の事、私達の國内の各地方によつて呼ばれているさかなの名前を、地方名＝方言と云つて、私達が良くあの人は東京の人、あの人は大阪、京都又鹿兒島の人と言葉が多少違つていますが、それとは大部異なりますが、まあそんなものと思つて頂ければ良くおわかりの事と思います。方言は〝さかな〟によつては非常に多く、複雑化しているものです。良く考えてみますと、通常人の目になじまれているもの又は多く加工品として、又食卓にのるもの程方言が多いような氣が致します。北海道等では標準和名〝キチヂ〟を〝キンキン〟或いは〝メイメイセン〟と呼んだ方が一般の人に馴じみらしいようです。今こゝまで書いて我國で内地の溝等に多く見られます標準和名〝メダカ〟の方言を或本から數へて見ました處、何と六百以上もある事を知りました。

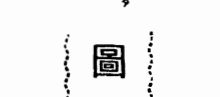
では方言はどうしてこんなに多いのでしょう。それは簡單には調べられませんが、大体同一種の成魚と若魚、形の大小、形の変化等によつて、一つ〳〵区別しているのも、その原因のようです。一寸考えて見たゞけでも〝ヒラメ〟は東京地方で小さいのを〝ソゲ〟と云い、東北地方では普通の大きさのを〝アオバ〟、大形のを〝テツクイ〟といひ、北海道でも〝テツクイ〟は刺身として珍重されております。〝ボラ〟は老幼によつて名稱が違つています。例を東京にとると、一寸―六寸のを〝オボコ〟、〝イナッコ〟〝スバシリ〟といゝ、一尺までを〝イナ〟、一尺以上のを〝ボラ〟最大なものを〝トド〟と呼んで居ります。北海道でも〝イカナゴ〟の小形のは佃煮にされ、私も良く食べさせられた〝コナゴ〟それより小さいのを〝チリメンジャコ〟大形のを〝オオナゴ〟といつて親しまれています。刺

身の最上品とされている〃スズキ〃は東京で、小形のを〃セイゴ〃中等大のを〃フツコ〃大きいのを〃スズキ〃と云つています。一方産卵等の色彩変化からは〃ウグヒ〃には海にいるもので腹部の婚姻色を呈するものを〃アカハラ〃と云いますし、〃マルタ〃〃ハヤ〃とも呼んで居るようです。極く手近かな鮭は海にいて銀色のもの、産卵のために淡水に遡上したもの、又秋とれるもの、時期でない夏に獲れるもの、形の大、小により、外形の変化したもの或いは漁獲時期に獲られるもの等によつて色々と名稱がつけられております。

又方言の中には北海道の河川で漁れる〃メナダ〃を〃ボラ〃〃マルタ〃と云つて誤つているもの、〃ハゼ〃と数種あるものを〃ドンコ〃と云つて総稱したり、方言は種々雑多です。

斯の様にして、方言、呼名は或地方では同一のものに別の呼び名をつけたり、又異つた〃さかな〃に同一の名を付けていることが非常に多いものですから〃さかな〃をしらべるような時にはよく〃さかな〃を見て、必要以上に混同しないようにするのが大切ではないかと思つて居ります。

さけ・ます孵化場調査課



圖書紹介

最近入荷圖書の中で筆者が讀んだもの丶中特に水産の專門にたづさはつて居る方々に是非讀んでもらい度い本を御紹介致します。

〃漁獲統計標本調査法〃　山本忠著　北川敏男校閲

財團法人農林統計協会刊

戰後推測統計学は各産業部門に應用されめざましい發展を遂げて來たが、諸種の既刊書籍は其礎理論を主体としたもので数学を專攻した以外の人々には難解とされて、水産その他の産業部門に携る人々は極めて取付き難いものとされていたが、本書は初心者の爲判り易く、水産に関係するものに特に理解し易く書かれている、推測統計学の基本理論の平易な解説に初まつて、標本理論の基本公式の統計調査における導入から、この利用の意味に至るまで引用例を、專門の水産に於ける実例を豊富にまとめ上げている。從來から難解に見